續孫集毛二編

下

N3
3124
4

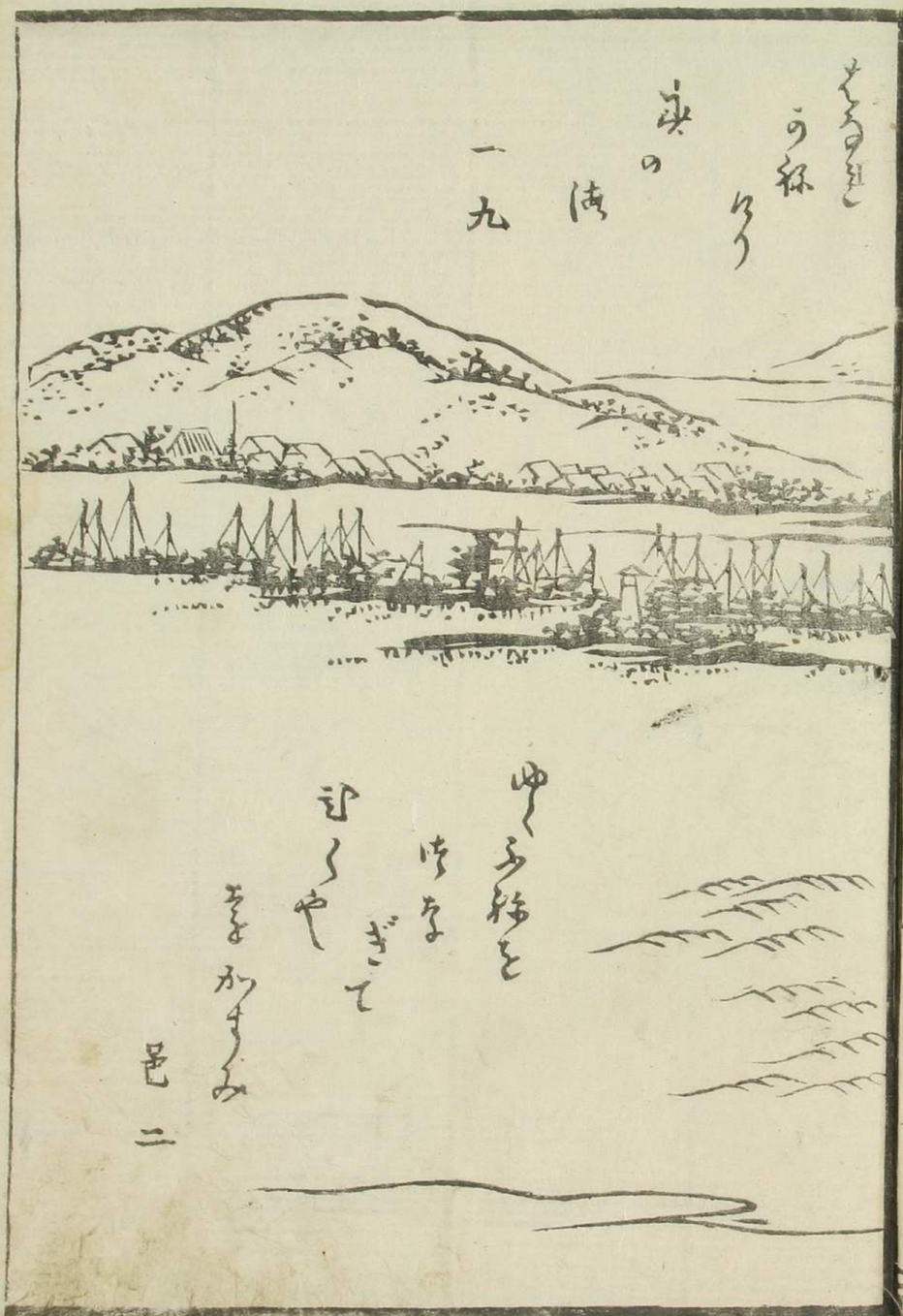
宮嶋糸詩 續膝栗毛二編 下巻

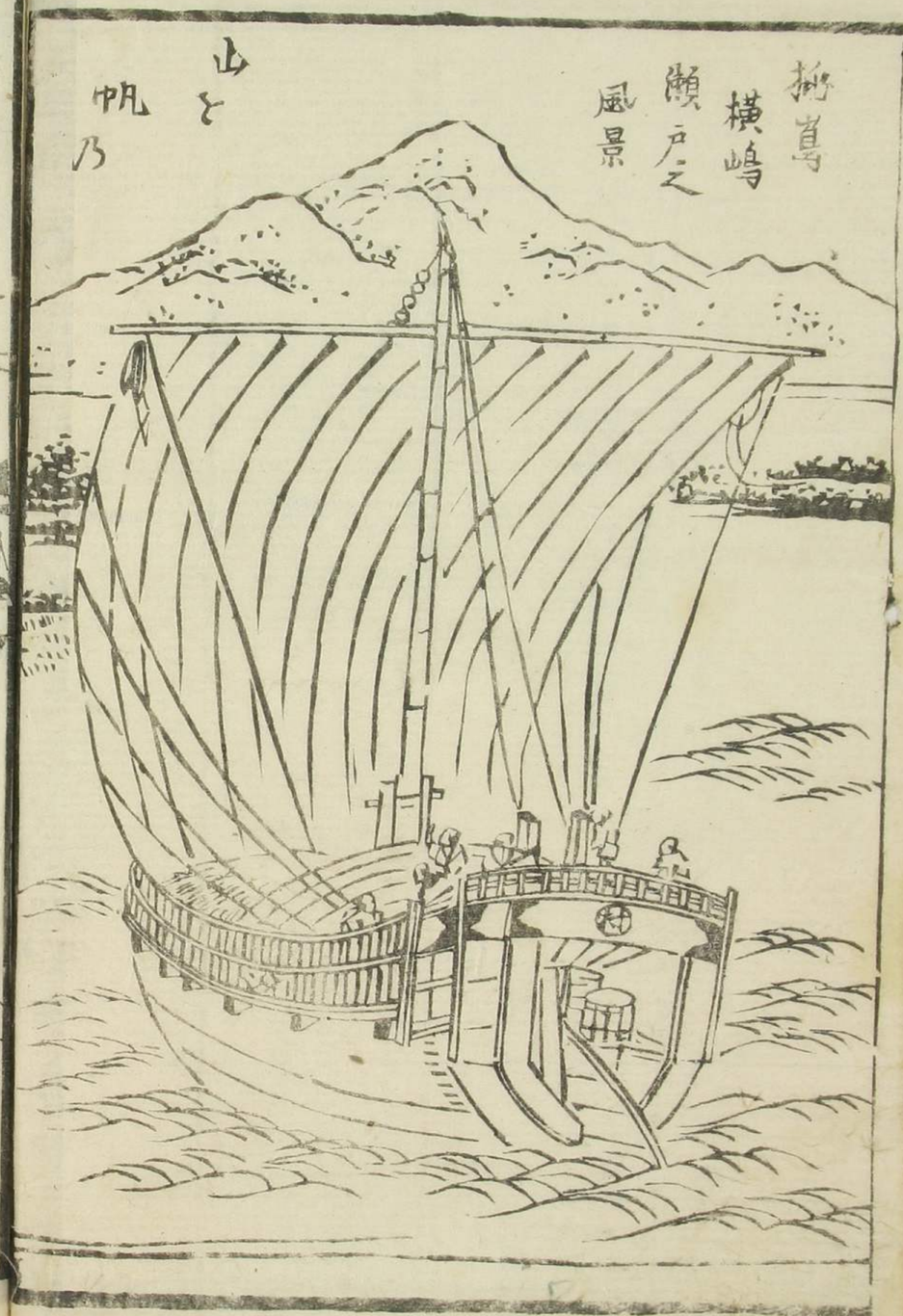
かゝゝ阿伏兎を案内し。横島の漆戸をとゝり。
絵の島沖の渡りあり。にいとゝし。西国方の
仏大名の出私なりとゝ。紫の幕打まわし。名
毛の陰馬乗るなど袖のうとおしてゝるが任白
の吹流し風よまるびひ。方よひるがゝりて美くゝ
いとまびよ入えとゝ。代おん私を小私あまと
二分よるびひ。藤掛子をそうへたひ

ヘ13
3124
4

めづらしく。[illegible]を音「グロタイ」[illegible]
[illegible]「めでたのくエイリヤ。若枝もエイエイ
[illegible]
枝もさろく茂るもさろく。繁る代のナ。[illegible]
よ。亀ハ万年ヤ。エイワリヤお私ハ千代迄水長源兵衛
ヤ。ヤヨエイヤたんく玉の光ノヨウコン唐木ばくろ
ノホンホホンホウ　ア[illegible]ンいよく「エイコノ「グロッダイ」「ナニト
さるやるのんどやアア[illegible]く「そのさぴ[illegible]の
ぴと[illegible]と[illegible]よかりいん[illegible]ぴ。「ぴのやかしそのの

ぴ「大阪ノ」さよおやらんのぴんとうとれてのけさ。
酒買ふて入まつく[illegible]
[illegible]
さてなつさ。私ハが酒をもつく[illegible]
[illegible]
トかのおせうぶぢさんの酒樽ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]「コリヤ」もりうい。[illegible]
[illegible]
[illegible]と[illegible]


一九
芭二


横嶋
瀬戸之
風景
山を
帆乃

おりまたぐろく「小八」いろがいてるまるぽ
るんぞいまりのがそ〳〵「大坂」ぴーてる無箱
のあたぐらぶあるぽよん洗ゆく並さろん「張」ゆべ
の人形のあて並ぐ〳〵さぽたくつけるとん火の
得ありのぐぽそろとあめ「小八」令点ろ「小八」しゆうちの
ちけ氣分のちけぽ〳〵何も者が稼ぐの「張」イヤ
有ハものらぶぎらんでもあるト「おせろ」が何のろげ
そろとろぐ〳〵そ「大坂」コ〳〵ろるせく生鼻ぐうぐあぐ。「ひさりけろれを」

のあ〳〵「小七」三本まんぐ「小七」持「さん」ハありがてくのト「中そ」
るるあ〳〵を一本ちぐ〳〵さ〳〵ぐ〳〵ろぐ〳〵ろ
ぎちゆハハさろ指をあひつけろるるをとぎぎ〳〵ぐんをたとの
るるく〳〵「代」ヤア三ぎハぽろのるあ酒ぐろく「大坂」ぐのあ「小七」
並酒ぐやあろぽ〳〵ぎよとぐぶろのん「モウ」ようろ〳〵ト「五合」
むろもつぎとりてぐれも「小八」せタノ〳〵ぐるぐでたぐ〳〵
りとのぐぐそろとるぎ〳〵「函」
るのせく「函」ものらぶ毒味いるぽ〳〵ヨトぎ〳〵ぐ「コリヤ」
さく「大坂」ぐろいけ稼く酒ぐ「大坂」ドレ〳〵ぐんよりあるん。
ひとぎちもいけんろんのぺ〳〵ぽトいろちぽひぐ「張」
のまぐいりのま

あそこでとをいひるがちさくつあるくつちやこんはのぐりくしの氏
うちあのへきを井百姓のめうをうちとをぎ尾のきあぞつをうろ
鞆より西西 五里余 北東へ山ある。ぞうのそへ入海乃
深うの。鞆よりへ行まゑうて繁昌の地ゐん
ぐうづの商家残るかるく。殊よ築出の
形地あへ。按女町ゐどありて。中ほ市一の濱
ありとぞ。

日の新へ青海系をてらしつ
光る孔雀の尾の道の沖

これより鞆をうちつるぞ。南の方山伏の瀬戸
見えうの瀬戸。鼻ゐる瀬戸ゐんどいへとうく。
砂見鳴 鞆地鳴 をとぞうく。瀬戸四といへあうう
ふいうしし 目をさまし 「コリヤ久三子ヤ。目をあけん
ういのどこりとくづりもつさぞやあう 「エイ
ゆちあどもいへとをうぐ。だいてよへ久三ぞ
「エイ 一盃やうい。ぞりやそのまぐどもてばぐ
せあい 「エイ これう子ヤトかのアとを中をひくさんうく 「コレ久三子ヤ。

ことごとくよいぱぎうひんども喰やせんえい（久三）エイ。うら
いろふてもんませねえん（ゐ）おどれ（ゐ）酒かうり（ゐ）ある子や。
三本の見ども二本あるえん。ちろもノヨあとあいあ
るんえいぱどれこそひあくさおやあろト（大）他の男と大きまちるとうふく
こるくさあんのうちふあーく。今よやさ酒樽をえんく（コリヤその酒
あるでであろうと目ひき袖ひきーてそあるとおせう（のう）
どもこんばとせ。時よ茶合（のう）のお花（ゐ）酒ひとつどうぞ。
ゐトいろよこまくぜんこくの（係）ハイ有がとうどうやとぶ。
（要用はこうこそこまれば）（ぶらこうこう）
いろこう一向茶酒清でどうやとそうちやの祝きのお

かうえん（小八）イヤえうちも下戸（ゲこ）で。一杯も下さうやあね
（大阪）いひあんせこうみよこるみ不得（ふえて）でどうやさ酒
る（ゐ）ツリヤいるるぱけとおいりのん。おもぐるふて
いいんりのどやぱうまれかうまれまよとぐるん。
コリヤ久三（久三）ぱいどうとうれ（エイ）エイ。コレ（おい）コレ。その指（さし）どや
るんぱツリヤ毒千ぱ折角（ちうく）ふうつこぶ。あとのも造（てつくり）で
りこるんぱこぶんな私（あな）ども。その酒（さけのこ）呑（ゐ）ちうこう。既痛（づつう）
ぐーてこまるりのどやるん。色（つこ）の中の世間（さけ）

ごもばっせん トさっぱりしてあっしきづくを 「アイ色へ
格別ふるい酒じゃ。うまいく そおあっぱっぷ。ふる
下戸で残念い ト ちっちっちっ

ざぞ。ごんでもよう〳〵とうこもんぱ。まつ〳〵おいらも
ひとついさぜたやせう。コリヤうまんへ。コレも我の
元の弟のことておきや。イニヤうらぞのえん
のうちむさんけよ。よへくひまやせぬ。ナニこれが
むさんこぶあるものざ。むさんともく。ぞうん
せうじやうん。阿伏鬼の口ぶ会はよるる
乗いこらぞんのうちこてろのそくじやあつぶ。
ここのうちのおどまんとものが。薬釜の中ろ

うんのうちをまつすぐ。はいてじや
和さよ。ちつさあぶ遠おろ〳〵あそびおつぶ
子や。てうどざんこづちのあるを。ところだらさようある
屠ども。あろうろうされおつさを。ゆ幸ぐんく。
コリヤひさんとあおつさと。その屠ども。ぜんだ
のつてひつさこて。ろつあつさうのぶ。ぶ
そこよ。ぢづつのくある上へ。ばどまんのついて
おるうんのうちがひよんとたるぢづ出おつさを。

備後國尾之道

ゆゑ
船も
をりて
ゆる
長崎
さい

備後
おりて
の
来
の
海
ゑ

十返舍一九

めでたくこの中へ入まおかつぶやめ
たくこのさ餅へ屠どもとろんとおるどやあろよ
そをまもいつまよよはさまぜおろくとろろ
ろんめちどやぷたくこくてくろつぶやー
そをまぜ紙えもろくケニ。もろくんてどうだろとまよ
とぶろん。黄ろくいのろてりてまろこのどや
ろんめ。ナニさぶさろちの中へ子供の羹ぶ交て
屠や。たろ。おめくとんぶさめ紙ろうせさ。イヤこの

もせうどのぷ。さろ稲くとろくぷ。うぬぶこうねく
りの紙ぷのぜもいくよろうせさのぶぷろうも稲く
ぶくおうぶ。ナニ。おまいぶそれもろん
ケニ。ろいぶやろいろん。ナニとろんぶとやァ稲く。
酒といやァろくでも稲くさけをイヤろくでもねく
餅ぷ。人よのまぜやァぶそぷめくまろんア。稲が
ろろくろのろぷ。ゲエ。ゲエリゲロくト。表面のえぶさりちのゆくいぶ
いぶとこでのゆくたろ。ユリ十。倚ちろさんくぷそ。ひさん

ととやコレ　ちまん下戸じゃとゆうてぴぢう酒
ぐさいをどーじゃ。そーそこぶいるぞーびんのあー
どもとれぐらんーとゆパアきとへおつぐぐらーが
ぶとをどもひぞうびんとてらんーとるバイヤ
ぶとうこ本めナニこのこの城をとうてとるのこ
ぶりイヤーこまちんいかないバだうをいかるごりロ
ものべ鞠のやんだうやでこうこのぐこ　ハーー
ぐこうこうあ。ぐうだうしーこうこ。むーかう鞠ぐこ。

昭和　さまのさぶいまゆあてぐどうびんこうんケこ。
うもせんとん。ナニノまんぢうやでこうてこまる
りのんこの酒こいをどもそれでまれぐこへを
ぐこ。こへづきゆん。エイコレとんん。ぐこ。ぐこ。ぐこ

ありやアがる。あてくへ。ちごぞうとつ法ようぞうとべ
とてト　もるべーしろそつをかくらんとて。さてさハがろどこよ
をぞうどうさうきうりちをつくひやうしよぶをくも
ゆる　一ゲロリく　大坂　コリヤヤ〜ものぐや　ツレくどこアよ
も。そぐいよどうびんの　ろどさをさうれと。
コリヤよそまんろんト　いひさまよ。おおきうもへどよをぐう
へとどうけよろうてさうぐをのう合の人ぐあつちろちをうぐあ
ちゆうくよ　ちぐゆるけうちあるハ忠のうををちぐ二股とふ小儀イ
つ　尾のろてうう　七里余

蛸のあくひ　嗔恨の根もるくて

いぐあひりちの私の案合
それよう坤の風もとう。汝もようかくを移べ。
紫浦とふよ船をつけて。その夜いてよこまろる。
翌日北嵐のあくを追風のうとて船出ぐ。かまうの
陸戸を打ち。平相国清盛のいつく神のおん神を
ちぐまんと祈誓あり。明神大蛇のかたちを現ず
ありひけ上べ。お国おそれのひて東の方へ漕戻させ
ありよ。おもひ向ひ沒ぬて。私のぐうがさうしうへ

相出いろのひて。海上をふませのひしゝべ。沙
逆さ多よ上のうえひきしゝ。ゝのうつさるふようて一居を。
清盛のふゝこの淵戸といふありとぞ。

清盛のふゝこの淵戸。田ろのハ又
ふき出ゝ笑ふ山の追風

芝より鼓岩 市日市紙とぞて。ゆどるく藝州
宮浦ふぞ。ゝゝる。惠の海より二十里余 ちんどゝゝ七里

女神ふてゝゝせのふ宮浦の

神ハとさら家ふどゝゝ
此所ゝゝ。ゝゝ陸よのぼりそれゝよ扶投
して。ゝりひくよゝゝれ西くまぞ。ゝゝ小八へ
そとゝらゝゝくとゝんあるゝつ。やどてある
旅籠屋。ゝよりて「モシ」ゝんゝの女。どのぞ
今ノ夜。ゝゝちゝとゝくゝのミやを 男の「ヱイ」
ゝとゝうでどんゝゝ。ゝふりしやゝ。ゝ生ゝとゝ
どゝちやでゝゝを「ゝちゝ。武州ゝどで

ござりやせ　男　サアおあがりなされ　コレおちゑん
どのおりて二階どものふ間めへおとづりやて
いんせ　女　よりよりお出なされまし　こりゃへ
お来なされませト　小八　なるほど宮様へ
女のいひなりごとさんざんでまんざらで祖へおろ
ものばの　ほたる　そりゃ　小八　なるほどそうらう祖へうらうよ。
女のことをいふうるせへ男ざ　小八　もいふをたしなまな
せてもいてさらばけをおろふでそふうまくれ

さる祖へでいろ〳〵　清左衛門　コレハよりお須でさるほどぽで
お宮へハは糸清でおんせんるる　小八　イヱさとぐよ
とへめりやさいさあはくるるべ。今庵うら
どもかのお宮さまはよりお姫様をお上なれ
まんケニ。まあは指ども。つるへされまして。ダさう
なりとは糸清なれまセト　ひとそかつまかやぐまく指ものだ
なるなるがなきさりく
なるなるがなきさりく　うらおとづりやまたケニ。お宮
へおまへうるのをまさせ　清　アイ　りそやせうもモシ

錢を紙屋が買てうんうんそうして草履をと
一ッそくそくのこゝろ女「エイ〳〵うるさいでうう
ごんさうト甫際一斤うけとりてゆきさうどうぐ
をりてきうる「こりゃ錢ハ是だろうゝ女「さあはやくぐ
おんさとうんのこゝろ「ぷらう紙れか
「きゝ女と三女のれじゃケこそれで紙屋分て
ごんさと「こゝア銀れうゝ「ようあゝ少ア少ハ出ようけ
ようゝ「こりゃ女中おあくつまそらうてこまる

のう「女」いろきよあ「来」るあるまいませ　ト女のあんるのよ
うちつれて
ちりで「ぢ」ちそぐれの松だ「ぢ」をとぎて「ぢ」焼肉「にく」のうりんるえ
社況の花鬱いんだうるるく。四方社の内陣四廊。百八燈づろ
みあ「ぢ」をとげ東西の松の木の「ぢ」紅「ぐ」、石燈籠もびしくしく
ぢりつぐれしるけ「ぢ」きぢをとよ「ぢ」斎飯とりんへ「ぢ」。四九燈の科をぐで。
銀六十灸ろう。これいを宵「ぢ」鉄燈の施主ありて。
ぢりそろくしるるう。先ひろやまりて。

琵琶「び」ぢ「ぢ」せのうん由ろや法「ぢ」人よ
だ「ぢ」ち利「ち」生「ぢ」ある神「ぢ」ぞ「ぢ」るき
ろよ泉「ぢ」山の宮「ぢ」巡「めぐ」りといふのあまども。夜中
の「ぢ」ろのれば。先「ぢ」焼「ぢ」肉「にく」の末社「ぢ」のまあ「ぢ」ますよ

巡「めぐ」洋「よう」してあ「ぢ」るを「ぢ」とぐら。松だ「ぢ」ろよさ「ぢ」しかろ。
「ぢ」るるわどぢ「ぢ」ぢ「ぢ」よきんぢさ「ぢ」ろうん。も「ぢ」定も
信「しん」撞「ぢ」ぶ。又此「ぢ」婦「ふ」さまも待「ぢ」撞「ぢ」ぶ。コレもあんを
此「ぢ」男「だん」が念「ねん」がけ「ぢ」くのるか。油「ゆ」汐「ぢ」まるさ「ぢ」ぢるあ
「ぢ」ナアニのよろ「ぢ」くよ西「ぢ」紅「ぐ」しく唇「ぢ」のん。サア
ぢをひくよ。ろ「ぢ」ちんくよ「ぢ」んるのせ　ト「か」の女のぢをとろて
りよせんとられば
「ぢ」ホ「ぢ」く。もろよん工「こう」としてどやとぢ「ぢ」ろこれつ「ぢ」る
ホト「ほと」ほとをつきとがとぢ「ぢ」ぐしろのうるよ移てある。麻のあしよ
つまづけが。麻もぐろきて「ぢ」ぢろこてぢ「ぢ」ちあぐるよ。ぢ「ぢ」ろ

あんさひろうして　陳　ヤアくゑんざくト　さり気なつぶせば　蔵いよう
もうろうとして　いつさんまるのごと　女　フホ〳〵〳〵ひざくりこまよがつてどアリヤ
　　もどろきてとびいざとこさハ
　　変の蔵でおんと　陳　ナニ蔵がこちらよめやとろ
　　女　ハ神さまのつろうめどやケニ。ゑんぶのもあん
　　るのげよ居ありまし　陳　ハアそれで蔵つひと。
　　そんとこんまふどよ。ぱまこの男ハもやろうよ先く
　　迷出ーこんさいろあ　ナニトもめくぱ　とうひ　ぱ有ものふが
　　ぢんがあるがきいてこまと　女　ゑんどやへ

人ゑんざとんまれさころ。ぞんいそだ。あこうよ
　　右ろら左　陳　撥ぶ　陳　ぱ　陳　ぱ海　陳　ぱ　陳　ぱ。そのろり
　　まろーざトせんこくの限れを紙よつて女のおとこ
　　けだものこんでぶさつこまもを庄ぶ　引ろ
　　そんろるけるこまとるとぶ。もごれんさゑがこどいる
　　女　房　コゴトイフ
　　ケニ。たろのーろのあれトあたこみてゑの限れをはぶろうさろ
　　つけいどことをはぶろうこそやつへんと
　　四五間だろうもろうみーろーが限れをとろうけられ　ゆこそこ
　　あとしてまるころれがおとこりろーしてぶろーーこぶりあろこ
　　ゆこさこーこるこさこハハ女ところれどころ　ゆこ
　　ゆこいどこ　ヤーやとーこちりどろ　ゆこのこいをこんこく

ト　ふうとうえれば又麻ぐまりて　「ハ」　「ヤアくぢちくせるめ。
　　眼れとむまりくとうつてある

三衣を掛よふぐせヤアがうさらめ（まいやつぐ
ト　石をひろいてやさて麻ようちつけると　「ロイ」　麻よ麻ごろも
　　ホのりめどめ四五人とうあかせ

うちもるハ。どやハ。どうまうまつけるぞ
ト　さうぶぶうとうる　「ハ」　「ニ」　とうつふハ。ちまこが石紙ぶうこがごのこと。
とうらうる　「ハ」　「ニ」

とうやうも移（ホのめ　「ハ」　「ロ」　神さまのお麻ぢやホりで

さうこやうつハ。金ホ（もとどうて。ホりの傾親
どうとうよとうる。うせけ（うまる」　ト　はたらどうどあるとうる
　　史ぶハもてくどうれ

これとあうとうくども多せいよぶせいうるうのつどつこあふと女かうくくと
ホのりめどもよあいさうておうとくさせうるうる。ぶハぶとうろうの
おさてあて麻ハ必稚のうろうあるうとて人られようまつぞりし
麻とあやそしりのハ移ようそわくの三点とりひつるうる史ぶめの
ども。かくハのくう
いひうるこうさうう

凍りて麻うてどもうまうとて
痛　入うる　こ　　女　　ふぐ
かくてそのまま旅籠屋ふ海よ海くうるよ主ふうと

出ありひて「是へおそくまゐりてすまあれ。サア
お湯が沸ましたケニ。お入なあれ 陰 アイ。そんど
吳雜よあつて。沸ましまして。ちいさい。
ちいるべんろ トそばよりどのくさらいるきさはいりもの二ろの
ごーをつまぶるると 出 アイ とれはほうの祝へみト いひつ二つ三つ
ろへくりつてくる
ひておろいまる紙よつまがつてあるのと。ぶてほれト湯ようあぐう
ますり。小ハうろうてうよゆくどのまるすぐさーきる西ぶがうあ侍れとさん。
ろまー ーチハせしるぶどろ。ろくくくハ宮。宿ありてほろろ。小ハろろハあろろ
ろまろうーくーども。ろろろのーびんさろよ湯へいるとうきどのうぶうく
ーくーくいひしるぶのがて「コリヤ。ろぶ。蔵ん。何と。ろろてある
テヤ。牙ども。圓。商賣どものの出入でハろうだの
ろ。旅人ども。相宿をせるとも。ひ方。家風ぐく
ろろろひとどやが。我。蔵。白。家業のろぶ。
そんぐんどけハのるんぶ。外の旅人ども。
牙。ろん等。ろうさろく。風呂。さまく。入まあつて。
いろぐ。ろまろひぐく エイ。是いろうら 侍 ろ。関法で
ぶんとぶめんろあれ法ろんさあまさセ「イニヤ
まろうろろんぶ。牙。ぐろ。今日ハろんみろ

さるきさぶろさわどる。湯どもちゃくみやせとア
つけさそれよるぶ。こんぐるよるのじゃ。此茶
はた方出入ぐもぶちあげるぞ。エイ〳〵。さあ〳〵
ぶも作らまして。ぐらら遠慮どもいて
ありまんぞ。おうちやのお家じもさらく入まほ
ちゃ。兼相ぶやケニぐるもちゃその湯どもぞ。
ぶうて汲智。あさしうたもやたケニ。おもまた
さんてちうゑさアれませ。イニヤ。月ぐとう。只今

より。外宿まうづんだいどんぐるる宿
業よいうるんぞ。ちんるげよ。さあはたくりん
つとぐいろ〳〵ちうびとヤてもは得ぐるいケニ。
ちゃよとぶおんせん。は揚ぐるとうなと。
おぐざあまませトさうたうぎれよあうてのけられいま
るれどそやもいれぞ。侍今青もるうちぎ。変を知てうく
方の定宿いておりるのぐら。月はんるをるうけ
ぶうまる。今日遠足どもいさて。だりぐてい而

をんなこゝにおつてゆよく
だんらのゆへばくんぞく。旅籠錢どもとゝせて。
身がとうの借うけしさけ屋敷どもゆとうのうち
今晩一夜ハ此方の宅も同前ゞや。ばくんぞく
「ゐるゐるゐどゆも宿賃どもいてゞもありまして。も宿
ゆとさ屋敷ゞやケニ今夜だけハあること方の
お屋敷。敷りとよおびさるとも。お勝ぐ
おびとゆゞうだうとなるあれませ「侍」まうぶ。身が

とう夜さまよ「居」しても。ゆかるのうだんみう
「侍」さあつゝでおびとゆ。雪屋ども
ハ此ざゝれさるよ此ゆゝ。ゆゝ「エイ」ゝとゆとよ
「侍」あり。おるゆうだんゝ。此屋敷さまよつゝて
おる雪屋ゞゆ。今晩中ハアノ雪屋も。
身がとうの雪屋ゞゆ。ゆ今たれよ張ゝとゝゞ
ゆゝハのうだんゝトのゆゝ。紙をあゝのぐらゐんさ紙よいぐ。
「エヘンゝト人のゝらうて居るゆゝとよおよゝゆつきゝうて
ちりぐうざれおきゝうゝくゝんまうゝ。「侍」ムウ

はしかのものでいるうだん。コリヤ〳〵てのもとぶぎうへ
いよ〳〵身を雪をあつらへひあるる。風呂さまへ。
外の旦那人どもをさそひ入をあるまき雪屋どり〳〵。
なるだん。身をもうし余人をさそひをあるてヤ
エイそれいらそんぢ侍ありませぬ。ちろんぐんへ
をまるるんぞ。アノ雪屋どもも。只今らをぶひて。舞
るをせ侍エイ〳〵ふぶばらをてへぞうだうと波を
ケニ。てるのをとをいが今いうきあへでけぬらひで

ぶんを侍いろさま建立をかうよ。身をく新
るる紙てやらんだん。トはちちせちんよう出てくる
侍あ。何りのぶヤテヤ。身がいろの雪屋どもへ
扶持もせるんで。法紙法千万。没落どもお
るるだんう。身ども不学どもあるるが。只今
るるるよるつて来うさトそのやうせちんへけぶ
りうあるうとをとこーハきぶげんあるりきうーをあのさま
むぎのどいひてらんこるさるよ。ぼうーハハふをまひとへぎを
はいさをちーく皮ぬるうち。侍
ちんるうらんをりちきうり
あうるあれやせ

「ヲイヽくあるさんぱさろうきろうちがらうことと。
あるいぶろうの「女ヲホヽヽ。ぞうだうもせうケニ。まあ
おまうのあまトとこをとうあてがひおろうをねさせておん
どうへうろうをくりちゃくとおろうてぐうあてそこハハせんそくかゝりあきるがちろうを「侍コリヤまめく
出しぶとんのうちふそむまありゝゝとうろう
何をとうく「下るんでもも稀く「侍むちやくおとぐ
とうるへぱれふもちうとうれうく「下ちがひが悪い。
ひとうやうろうぷソレるげうぞトまんだうひとうろ
きぐてひとうろい猿と乗しあひとうるげてやる。
まのうとうしゝ乗い犬のぐうゝ町中ゝ
様へ気くの度相よあうまうあて二うへざしまうる。

ひりのくあるとかんぐくうぐひうていたれとうとうくぐも乗猿
ともよ神使ぐうとうてぶのりのこれようまへざればりろうよ人せ
おそれぐこうひもけやどの窓ようる猿ともてぶざ公のうふぐう
まざれぐうまくりろをうぐひるうろうりてゆるうちぎうこうちがう
るげうるまんだうをひたあくうとうそうふぐうろう猿初にあてまの
まあきりのるればそのるげ出しるおとうかんぐどうちちうろうそ
くうふをぐうりろうこうまうぐば。「侍コリヤりくどうくるげうろう。
そこうあうろうとうざうりまうろうそ
さうぐうろうれ稀く「下うそうろうぐひとうろうくぐまで
いよしる「侍イヤまぐぷゆんうろうようろねくまよ一ゝ
うれうく「下そんるうまうまうるげるぞトまたひとうるげて
ひうひて「侍ぷうぐうれ稀くいぷまめくぐうろうく

なげさぞ　侍　いやくそのほハこの猿（さる）ぱゝ
みちゝ　侍（はべ）　エくだんくのなげきを
やゝとおきさるをこそ。そこゝさぐうさんをさきぶかの猿の毛（け）よ
さろうびろくてゝほをひろこませべ猿もこそくあげて
ゆく　侍　なんぞ猫（ねこ）ごとゝみる。シツシ　ト出うちたやゆハさ
猿ゆうろうゆうこそて。
ほけゝゆふこんいなぶうさやくくと移むるうち。のとゆうへんのまる
ゆくおとのようみくくうくとたこのるゆとをゆハきて耳さきこそ
さてこそゆくそくせーかの下女のちのびまるるゆふんとさちゆこるよ
女ゆハあゝでせんくの猿ゆハのゆところよゆちぐるくのあるこぜうち
せーゆやこそろうくくこそひこうゆ。ゆハのまくりゆくうちふくんのゆへ
ゆをさくこゆむとゆハこそろえゆこまんとそゆゆをこくぎゆうてんしゆ
ろくこいへてたまうへせば猿ゆきまゆ
かちりつゝほけゝちどろさこれゆまさこそろこいふてたゆちるひゆし

よ。猿（さる）をこうつてゆこうり出さてと。猿ゆうろくくへがさくくとるこまをつこひ。
かゆゆの上へうけあぐうこんゆこうくくこのさくこうこうハこうくーが。
ここよゆうのこうくーちるの少ひんさこくくとびつけばこれゆまこうとだこうう
ちどろこくおきあぐるとこまくくゆゆくくよちどろこどゆどゆくくとちきこう。
このさこうこぎこよ猿ゆうこうへ出さをこうこのひあくちこうこくこうびあくく。
こくぐくまこぐこれくかれてこけるゆくちるゆ。屋ごこのかくくくゆもこぐれて
ようこふくこをこれざこうどうさこうこうちきへのお伺。こう火打こうちつけこうこふ
ちくうつけゆこよ火ととり　これば犬のどくゆる大猿一疋（ひき）くくの雲（くも）より出
ゆくあぞこまくくここくハとあこれたこて。大こくくひこるこふこうこのかくくこゆ
ようこくくこくこれてここのこくゆもゆくくくハこぐひくくこくこくこのかくくこ
猿ゆくゆゆかゆゆうのこるこくこあこここあくくとこここくひこくここて大こくくひこ
さこるここてゆもこんここのこんここくのくくこくこくこくこくこくこくこくこくこ
いくくんくくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこくこ
ゆければ

うくくと猿（さる）よこくまてくまんこくこの

あんよ相遠なる新の赤孤

かく打奥ゞて。少八もありつくのちぐひさることを
かくうるのぐさまて。打ゝしるが一瞬の変乃
うちよ。遠寺の種ひぐきことろう。鶏の変家毎よ
うこひて。夜もあけしるよ。ぐてちき出ゞ宿の
亭主ありてふ遅留ゝ宮めぐゝゝりくゝと
ゝむるよ。ふゝらい鞠の接女がいひゝとゞ。何と
やらかりしゝゝも。かくゝ雑あてこの絡よ

つきしるようこびよ。いのさまそれよりこゞ
とて。食事そのゝ案内者の云ことのを。
打つまて変を出ゆくよ。青物者るどゞとべて
女の賣あるくえてめぐゝゝ。又此ところの
名物とて。深揚枝をうる家あり。
墨数をやりゞせの神の町
ちろい歯えせて変ぐしる元西
かゝて法山よのぐり。仏法大師の宝塔をこゝて。

名所あつめ
阿山の
滝の
花の
あつめを
りて
おち
櫻花亭
金九

風
に
ちれて
峯
も
高く
花の
ちるの
滝
壺凡斎
南勢亭

澤の宮のあるうよいるモミ案内のおん。
山家へ何さまご縁。あんないされば見るやよ
ちゝんどんの「そして見ぐ二筋あるゝこりゃ
どうちくいろていのぐく「見」それもちゝん
さうん。それでこのよおまいぐさのあとつて。
あれおるどんの「階」のとうさきさま案内よ
「住」まてあるさまゞアゝ「ゝさよどやどんの
「階」それよ見をちゝくゝんぐくしさりのぐ

「六七」サイナ見ゝゝや上ぐさかゝぐやうゝけるさんぐさ
ぐる。山されの大日堂の祠きまで。翌日あとよ
いさとぐあつゝぐぐ。それもとされてよふおがへて
どやるいさうん。見ゝやいとまいといあさゝぐあこの
宿屋の旦那どのゝ。あいどんの。見ハちゝぐでも
あの元のいてどやるうゝぐぐやうけべるうん
さうん。ひゝよいけてゝ。ありよおとゝてどやあさ
といる「少八」ソリヤアそんぐさるゝぐ。アさゝ

あるいて出るがきれ稲へ。だんくるへせる
「アノ誰ぞあると問ひてゑんやせそれじゃと
いろきよきまるさるん「べらぼうめ。人よ
影をとよこるさの影をうけへきの稲へ
「そーしらしーしてゑんきよ「トこのうちなかまろう。
女まごうの大ぢいづれ伐の男よべんとうさゑるど「順
りさきてりづれもほきげんのちどりあーおて「ようその
おごまんえんてさちのおどれんえんがおろべ
ふといケニ。ゐてたぶはんばつておきあきやさる。

とおりふさうちよ。爺よ。俳さよみる子がでけど。
きよんがれる。きよがれる。ぶじやおざろや
やさぬるんふもはけざよ。やうらくと。
そろこでかのろよきやくきゆん。さるふ
きふれぬ。お稲様さまの仏見豆じや。トシトコく
トニトコナクワイ〳〵「モシ〳〵山辺のころ。何といふ
ところへ出るぞいる。さたの人「何ぢや。山辺ぢ見ぶがまう
じやるんケニ。どんるげる。ぶるとぶりうん

ゐうへぼるでおんを「そんじやうらん
ゐんるぷ。ぷてーどもハ宮めぐりをするのじやが。
ゐるんよいてゐいうんみさきの人「そんじやさうよ
はといえるのれト はうちさえのひとりのうちよ十八九
これよりとれてむすめのうれをぎろうしとゐんてゐると「アレ
さえのむすめもハをぶろうしとゐてゐる也ハ八ハ八のそばさのひとて
ゐん祝へ。アノ娘がもいふよりれうしてざゐき
うふうれが新だろうゐんているハ。ナニト どうぐく。
トそろう むすめのうへうろうまるとむすめい「いうしゐ
さきうるそゐるぷーまの女のうあとひうへく ちうしゐ

人さんじやおちうんさんはひうのゐのよ
衆をつけるされやトゆのくあうまとさぐう「ゐんの
ろうぷいあくまん「張ぐぐ。ぷめへの新ぐじやア
むすめのゐんてきうんゐのぐぷぐぐ トはうら
たきのあうへ
さーゆれが
俳殿の朱を奪へやひうされの
かうそうよ深るの濃のまうぐいと
ぷさえ文殊堂菜師堂のあるぷよちうう 俳

とて名物のもちをうる茶屋あり
時の名のちらちまるせよ夜いとぞ
祈ぐ人のはまてやは夫婦祈るらん
それより両顔大日堂のあるよいるこれ
より上の山又町ぞくうの間。稲くのまち社
多し。是を巡拝するを宮めぐりといふとぞ
一ナミト一盃呑てくるうとぞやァ祈へかぞいん
向人の茶屋よりの娘が呼んるが。小八どよるく

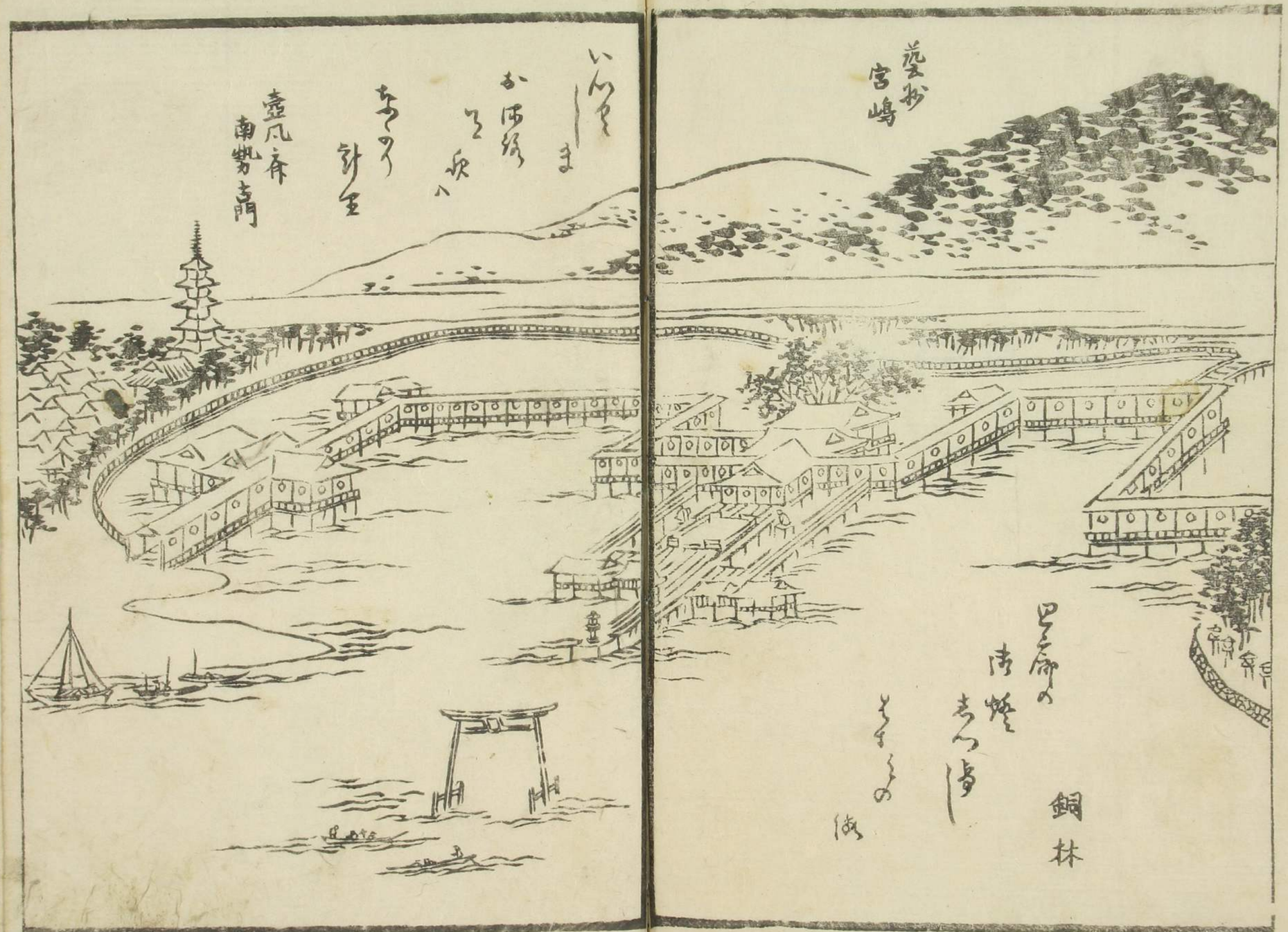
イヤヒヒ。あとの茶屋へいのけんらんる
張るゼノ サイノ 笑るされ。此近在のさる
今持が。妻ありいてプラーまんでゞやさん。
あとの娘やつてきまそと。駄ちくいよさと。
ソリヤ多いよつちや。なん度金沢でやろ
ろんて。お徒ハでけしぐみ。その男邪どんが。
張ろよいとて。いんまふまやきやれんさうん。
あとの内でんぞよゞあれるくと。毎日ヒヒの

而く。さてよりてせるさてんぷ。ぷよ入具形どんぼれ
まんていと。あてそん色非いてといよて垂さてん。
今いてら。又そのとを催促しもるどやあうと。
てそれがぬんぞうじゃやてんぷ帳ハアそんるふ
いてとがある。向んでんそのの具形どのまてふぞう。
それぞとてんの而んおいてをその今れふて。
ぬれていそんぞふぞ。そんまるとさてふ。酒を
出そんてう。只のまんといよかそうだうぞ。

ホニニコリヤ名てん。大でけどやてんるぞ。さいてん
その具形どんとていんへ。蜂がむしやくまやと。
色が黒んて。目が大きてて。鼻が樣よひてさて。
不男じやさてん。娘の素ぶん入まんれどそそ
レコサのてんとある人じやさてん。羊抱さんせて
娘くいんてものさがそんてとあまんがそのちうん
ぞてうの糸じやさてん。コリヤよてう。サアお出るさん
ト ささてよてちてがの ちやなへてうると
ちやヨ六七どのテヤ。よんるあれ。

一アイ地の田茶の旦那とのを。ゆうくうくうと
はれまふて来こうんゐ。何でや。おあさまが
来なあれこうコリヤ〳〵お坪のへ。ぽうくをきばうて。
おこづりヤセ。サア〳〵六七どのぽ。おづゐあれ。アイ
モシ旦那おあづゐるされコリヤゆるさうもあい
トうてあづゐ。ざよもうるとむこあへさとぶたづりてゐよ。
私とあづゐして茶こどがんをりち来るきんれば。そのはくうれ
四今めをそもり〳〵けれど。きアゐ
十八へきうくのしろもの。なうへ。ほてのもへきさゐ。
コリヤ十七どめて逃まをて。六七。ぽもこがの地の田茶

の接客たうさまじや。兼て御待のとをり。
おむをを出もくこのホへやうんををとゐさんがさ
までゐんざくよ。管持持芸人て。乗傾者じや
ホンニ六七どのぶ来くれるとをり。田地の来方や
二万へポーが小ばくんアゐやうのけてもくもんざい
ざくうさきゐ。こうへ勿論もむをとゐ。ぽやうゐ。
りのざんゐうさせてへもくね。京の深屋へいひ
つけてさこいりのへ手紙。おさすの左具も


宮嶋
銅林

長嶋うら。数亀甲の引もつきまくでさうらもせる
火
ゆんゆんてもうめくたるすーぐ。茶碗ひよ亭主
は酒でもちつうう出ーかるせく　一エリ。ごろうえ
まるこ　一はれ　とりんぐらりんぐ。ぐらぐらもむともゆんぐ
いやーどやアるめくぐゆるゆんるゆう　今者こーぐ
酒つて長る寝。おもをつれぐろていろぐろ
と。おぐぐをめうゆう　六七どの　一ふくうゆんとと
いふてどやト　いちちていもいるるをぐーもるゆぐ。ゆゆ
けぐんいふーやとりけゆる西へ四十あまりの

いるりのおりをうろく　一ヤアくりぐゆんゆるの待ぐ
とるうちとのぐけべ六七ゆんでいや　六七
たうんさまぐゆんくとうちんのゆゆ待ぐ。
トとの待をたうとのゆゆ六七ぐかうてゆる。ゆどやの実あるて。
大の今りちゆんべ六七ゆうくよりてた中。ゆとうてゆるふの
上手よ　待ぐ　一六七どゆ。ゆうらハうりさまのさうく
ぐうりゆんうう。ゆう元ゆんるゆて交巡りどやと
きゆうケゆぐんういのとでや。ゆめ六四のゆゆ
とぐんてゆとうとゆうらりうきゆゆりけ
ぐりゆんうぐ。ゆい西でうう。ゆうとうん

あて
こりゃ。毎日くあるさのおんくなるを
まちおりまーしたらんなぞうどあんだあいさ。
モシおんなるーやーさあるむさんぞ。色でおざるまたるる
ヤヨ　六七どのあのさんハホンニこのおくさぶりん
とうの指をたうさるどやるるヤアくく
そんどや。あうちやのおくハコりゃうそのの
指をたうさるどやるーと参くくるよ長沢ぶるん
さうい。アノおくを。指をたうさまどやとりみて。

ふの男を合そのとまあうさのぶ千ちいのぶ
コレあんまのが来てぶやさんぶりのおまんハいん
ぶんみ。そうちやの祝をさくようて居てこでんセ。
座敷の中ざーさぶ。おまん邪ケよるるぶんの
陽　あのんのうさいあくまいサアくあんまの
見邪。ひとうあぶりるるさん　指さエイコりや。お茶は道祖
じやぶんトりけそのむ内六ハゆさぶりてを事。さくつ
ちぶりのうちぶんさくハハあけ。言ぶんと
陽　こりゃうんざめふあハせる。六七どのあい

うげんふ〜ていの行く〜うに六七アるんアらいのピ
このもおろと。ぞうっとうかってないけんらんゐる。
おまいぐさ揚ようよ。ざるくいておこれるさん。
陪作ヤ叶ぐ屋ぐうめ。ぐもいふ紙てうさんぐう
ふまやアがる六七うんぐあいる。おまんぐかう〜
おようふて。ぞ〜ろうまん〜ところやるんふな
陪ナニこいつあてくあつぐトーまちやちふをしてて。ツ
てんうおろう月をうろあ少八ヤアくちようのあんまつ
まろうふやるとおておが病の陪コリヤ

大変ぐ。ヤ。そんぐことをまてのけ。ぞイ六七ヤアイ。
六七ヤアイ。トまつふうろ〜でうあのもぐヤヨ
まろぐまちさまぐうしてコリヤ死おるそふぐや。トくろやよあるどふきろけ。変の変ぐう
ようびいけてもぞうろうよやうまきな陪コレハ法まう行くぞ〜ろんであるふ陪ごるさん
まちの法んるふて来る人ぐヤケニぞやう
いろさよおとぐつていろんせ陪それぐそうして。
ろんるふるつて寝るりのとぐふ。ぞるんぐ。ぞ
も。ぞうてゐる人のとぐろ。アちとあ寝るよ

おいてやるがいい。ちいさい子さえいろうろ「イニ」ニヤ
まちがのれいうらまんてもある人でおんとぶけん
るのみて来さ人のごんちんじゃるー。爰よちんて。
りー死ちろーてぷうらのうちが稼れるケニ。
そんのげみとでけんらんトりのふとべて。ぶ宮鳥ろ
子をうむりのあれがその日のうち化五へおろつかーセナ又日とぞくて
体よかへとそとで又人の死る時もとぞよその日赤といふ五へつろーて
ろうむる。その家へ勿論きろうよ。ろろろる人までもそれーよ忌とろうも。
忌あけざるうちハ化へ出ぞーて法ーしもるるふひろれがぶていも
それらをんぞろうて。「るんでであろーとぞるさるーとちが

それはけさのぞやケニ。爰で死ちろーてぶどみ招
ちもむろうい。病気のろいふーて。もこぞろて
いろんせ「小ハ」いろさるゆコりヤア何るるよ。どちろうで
病気がおろうさとぞ。もいふふろうがつれて居るが
ろろろぜ「後」それざろうて。ぶんるふ生体がるん
りのとぞふーて「小ハ」ハテ。ぞるでもやろうて。爰あせるぶ
いぞ。ナニトぶてんーもぞ。ちろーよ。ぞるへあろふの「ナニノ」。
爰りとあやるんケテ「ニノ」へいてやーふてざろんせ。

それぢやァ法まつ和くぽんさんどのとる
イヤ来のどくなるものぢやぽんぢいさんせうち
そこまでかるで来もうさケニそのかるどもかくてやろ。
の繁せていんセトいひつおりてあうくちりぢやイくくと
かどをろぎ コリヤあうがてくぞんなのふもうりやや
てうけはける
せう ヤヨ左ゝ兵のふ。はなもち元鳩やまでのろみてぢや。
うちひとりさるきもうてもどるケニぞんぢいさあれ
そんなのふおめくこのきめと。はよ入うひとり梅組

どのへ イニヤ 片 梅のおんせん。アノ男ひとりぢや
ぽ 手 何のもぢ。かるかきぶひとりで法ものの久
ポンニ 梅組 よ。おめくどのくて来なさろさ
うち来て来もうさぢやおんせんアノもとと
ふうりでかんて来もうさのくや。殘がぢるケニぞんの
来てるりのうん。牛王さるの和きまで。坊さ
のせて来もうさのぢやてや あい梅がるのくちゃ。
たぢまう和く 手 この古七あぢ。癲病ぢもとら

稲くとこのつよ汗梅かうぐせるものを「ぬ」ぐるぐ
稲くぬ八ゆめくとかうぐ。汗梅いふぬ。
はんぐぞ磐をかうぐとハ稲くぐぬてアもうそんとふ。
サア梅組どのこゆをまた「ぬ」それできゃうこと
いふものぐる。磐のハ雅がのる。ぬいうが拳ふろ
「ぬ」めつぷうふもるのぬ。ぬてんくどのをのせる
じゃぐんせんう「ぬ」ホニそのぐ〳〵ト去セをかきひぐき。かぐようらのセ
おぐそのところとうきいぐ「ぬ」アコリヤ肩がめうとむゆうぐ。
りものうちくひうくて

ごうてきよりものい仏めぐ。ゆふいくかげんよ拳が
つきそふるゆんぐよ「ぬ」そふさ。癇病で死ぬ
ものハ稲くとふうら。今よ拳がつくぐろふ
ト去るのうちが磐のうちあて。ウミウミとうるこ云さるおかふ
去あさものぐとさくゆきあふおくふのくさてうる。ゆるおとこ去セを
ふつけ「ぬ」ヤヨコリヤ去セあ。磐るどもふ村のうちり「ぬ」て。
ゑい元ゆちぐやな。ろうさ袋のおぐれんが。東町
の金太とはんるのて。観音堂のろくへいきちろく
がろうさまきぐどうい。ふとんあうぐやトうちひ

てゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]